

オスカー・ワイルドとアメリカ

—— ワイルドの 아일랜드人再発見 ——

高 橋 正 平

序

ワイルドは、1881年12月24日リバプールからアリゾナ号でアメリカに向かった。翌年出航から10日後1月2日船はニュー・ヨーク港に着き、以後ワイルドは同年12月以後ワイルドは同年12月27日にイギリスへ帰るまで全米の100都市以上で講演を行った。「美の伝道師」ワイルド28歳のときである。ワイルドがアメリカ講演に行く契機はギルバートとサリバンによるオペラ『ペイシャンス』であった。そのオペラでワイルドとその信奉者は嘲笑された。1981年9月『ペイシャンス』のアメリカ公演がニュー・ヨークで始まった。プロデューサー兼舞台主任ドイリー・カートはオペラの諷刺をアメリカ人によりよく理解してもらうために唯美運動を彼らに紹介する必要があると判断した。そのため彼は唯美運動の張本人のワイルドをアメリカに行かせ、唯美主義を説明してもらうことにした。当時唯美主義はアメリカにはほとんど知られていなかった。ワイルド自身もアメリカ国民に唯美主義に興味を抱いてもらい、彼らを教育したいと思っていた。ワイルドのアメリカ講演旅行の目的の一つにはアメリカ人に唯美主義運動を知らせるためであったが、もう一つは『ペイシャンス』講演の格好の宣伝としてワイルドを利用することであった。アメリカの代理人モース大佐は講演によって金儲けをたくらんだ一人であった。講演を聴きに来るアメリカ人から入場料を徴収し、それを講演主催者とワイルドとで折半する。アメリカ講演はワイルドにとっては唯美主義運動宣伝と金儲けの絶好のチャンスであった。ニュー・ヨークに上陸するや長身でダンディなワイルドはマスコミに追われ、一般人の興味と好奇心の対象となった。1882年の12月に帰国するまでワイ

ルドはアメリカとカナダの100を超える都市で精力的に講演活動を行った。彼がアメリカで行った講演題目は「イギリスの文芸復興」「住宅装飾」「芸術と職人」が主であった。特に「イギリスの文芸復興」はワイルドが幾度となく取りあげた講演で、そこには彼の「唯美主義」観が強く訴えられている。ワイルドの講演は上に挙げた3題がよく知られているが、忘れてならないのは「1848年のアイルランド詩人たち」と題する講演が1882年4月5日にサンフランシスコで行われていることである。この講演は上記の3題の講演ほどは注目されていないが、アイルランド人ワイルドを知る上では極めて重要な講演となっている。本論では前半で「イギリスの文芸復興」「住宅装飾」「芸術と職人」3題の講演の内容吟味を行い、後半で「1848年のアイルランド詩人たち」を取り上げ、アメリカにおけるアイルランド人としてのワイルドに考察を加え、イギリスからの解放を歌う詩人たちへのワイルドの共鳴から政治的なワイルド自身の姿を解明していきたい⁽¹⁾。

1: 「イギリスの文芸復興」

アメリカ上陸1週間後の1月9日、ワイルドはニュー・ヨークの満員のチカリング・ホールで「イギリスの文芸復興」について講演を行った⁽²⁾。アメリカでの最初の講演にはニュー・ヨーク社交界で知られているすべての人が出席するほど盛況な講演だった。講演の内容はイギリスの19世紀芸術に関するものであった。ワイルドはロマン派詩人ジョン・キーツに心酔していたが、それはキーツの「美は真実なり、真実は美なり」に感化されたからであった。キーツは言うなれば19世紀イギリス芸術復興の産みの親である。ラファエロ前派画家や詩人一口セッティやモリスーがイギリス芸術復興の中心的人物であった。彼らの芸術観は美それ自身のための美を作ることであり、詩や芸術が社会的な道徳的な問題の吟味に専念すべきであるという考えに反対した。だから彼らは詩を社会的道徳的な批判手段としたワーズワースやバイロンよりは真の詩人と言える。美だけが永遠である。講演はそれほど俗受けする内容ではなかった。大体アメリカ人は唯美主義といったことを知らなかった。ただ一般のアメリカ人に

はマスコミから脚光を浴びている人物を一目見ようというやじ馬根性もあったのだろう。とにかくワイルドは一見する価値のある人物であった。長身、長髪、端正な顔つき、半ズボンと絹のストッキング、いやがうえにも人目を引くいでたちである。ワイルドは講演で彼の美学について話し始めた。ワイルドは抽象的な美の定義ではなく、19世紀イギリスにおける芸術文芸復興を明らかにしようとした。イギリスの19世紀文芸復興は15世紀イタリアの文芸復興にも匹敵する。両者の共通点は、優雅な美しい生き方、肉体美への情熱、形式だけへの関心、詩の新しい主題、新しい芸術形式、新しい知的な想像力豊かな享受の追求である。これが「我々の最新の美の表現」である⁽³⁾。この美の表現は単にギリシアの思考形態の復興とか中世感情の復興であると言われるが、それは「真の世界への復帰」である。イギリス19世紀の芸術は、その心のゆとり、健全な目的、静かな美の所有を特色とするギリシア文化とイギリスでまだ十分に定着していない個人主義とロマンティック精神との融合から生まれている。ワイルドはヘレニズム精神とロマンスの精神がイギリスの知的伝統と永遠な趣味の規範を構成していると考える。これら二つの精神が生まれるのは人間が「人生のより高尚な形式」と「より自由な表現方法と機会」を望んでいるからである⁽⁴⁾。イギリスの文芸復興には感性に訴える精神と知的な精神があるが、これはまさしくイタリア文芸復興と共通する。イタリア文芸復興もそれ以前のカトリック教会支配による信仰のために芸術活動が停滞した時代であった。イギリスの文芸復興を生み出した時代と社会生活からイギリスの文芸復興を孤立させようとする試みは文芸復興からその真の生命を奪い、その真の意味を誤解することになる。19世紀イギリスの文芸復興、審美主義はイギリス社会と密接な関係にあり、それは生まれるべくして生まれてきた文芸復興である。産業革命、ロンドンでの1851年と1862年の2度にわたる万国博覧会開催後の社会にはびこった楽天的進歩思想に反旗を翻した審美主義運動であった。それはワイルド以前の「人生のための芸術」観に対立する人生とは無関係のただ「芸術のための芸術」「美のための美」という芸術至上主義である。芸術は人生や道徳とは無縁である。ただ美しくあればよい。このワイルドの芸術観はフランスボードレールから始まり、ラファエロ前派に引き継がれて美意識に端を発している。

イギリス文芸復興の純粋な美への崇拜，形式傾倒，感覺的性質の直接の引き金となったのはフランス革命である。フランス革命により理性と実用性重視から人間性，自然への復帰へと時代が変わり，ドイツではゲーテ，イギリスではスコットによりロマンスが復興した。ロマンスとは人間性以外の何ものでもない。詩は，広く言えば芸術は絶えず科学と相反する位置にある。真の芸術家はヴィジョンの鮮明さをその特徴とするが，科学は芸術精神にどのような影響を及ぼすのか。ヴィジョンの鮮明さは偉大な作品の特徴で，高尚な現実的なロマンティックな作品の基礎をなしている。それはイギリス18世紀の生彩のない空虚な抽象化，フランスの古典派劇作家，ドイツ感傷派の精神性と相対立する。それはまた超越主義とも相対立する。芸術家は人生それ自身と引き替えに人生の領域を受け入れることはできない。芸術家にとって現世の束縛からの逃避はない。ワイルドにとって真の芸術家とは人生に深く根を下ろした，人生を直視する人に他ならない。それゆえ彼は「芸術家は唯一の真のリアリストである」と断言するのである⁽⁵⁾。彼が言う「芸術のための芸術」は一見すると，現実世界からの逃避した退廃的な芸術という印象を与えるが，実は現実を強く見え透いたうえでの芸術なのである。だから美のための美は決して逃避的な非現実的な美ではなく，逆に現実世界を色濃く繁栄している美なのであり，芸術なのである。ワイルドの芸術観をもっともよく表しているのはワイルドのキーツ称賛である。キーツにこそイギリスの芸術文芸復興の始まりが見られるとワイルドは考える。なぜかと言えばキーツには冷静・鮮明なヴィジョン，完璧な自制心，正確な美観があり，現実世界から分離した想像力の世界から考えるとキーツは純粋な穏やかな芸術家であり，ラファエロ前派とロマン派運動の先駆者である。ではラファエロ前派とは何を意味するのか。イギリス人のほとんどはその真の意味を理解していない。ワイルドはラファエロ前派について説明する。1847年にイギリス絵画や詩に革命を起こした7名の若者がいたが，彼らが自らをラファエロ前派と呼んだのである。彼らは産業革命がイギリス社会に及ぼした社会生活に大きな関心を寄せたが，ワイルドはイギリス芸術の再生を目指すラファエロ前派の芸術作品には「より装飾的な価値」と「より深い精神的価値」があることを指摘する⁽⁶⁾。ラファエロ前派は文字通りラファエロ以前の芸術に

彼らの理想を見出した。ラファエロの「皮相的な抽象化」よりも「想像力のより強固なりアリズム、より注意深い技巧のリアリズム、熱烈であると同時により生き生きとしたヴィジョン、親密なより強烈な個性」を重視した⁽⁷⁾。芸術作品が時代の美的要求に一致するだけでは十分でなく、もしそれが永遠なる喜びで我々に影響を及ぼすとすれば、芸術作品は明確な個性、一般人とはかけ離れた、作品の中の新しさと驚異によってのみ我々に近づく個性を持たねばならない。リアリズムと強烈な個性が織りなす文学作品をラファエロ前派は求めていた。彼らの主張が世間に受け入れられるはずはなく、彼らはただ嘲笑の対象にすぎなかったが、ラファエロ前派は単なる机上の空理空論ではなくそれには実践が伴っていた。

ラファエロ前派運動は空虚な因習的な作品、ワイルド以前の詩や絵画の厳格さを欠く制作への反動である。その運動は色彩と形態を特色とし、ロッセティ、モリス、スウィンバーン、テニソンの詩に表れている。言葉の完璧な正確さと選択、欠点のない恐れを知らないスタイル、言葉の音楽的価値への意識が作品に見られ、それは単なる知的な価値と相対立している。18世紀の知的な教訓的な要素が詩の世界に入ってきた、ゲーテのような芸術家が異議を唱えたのは知性の主張に対してであった。詩においては想像力は完全に優勢であらねばならない。生命力あふれる本質的な詩の原理が知的な感情的な能力よりも上位にある。これがイギリス文芸復興である。ワイルドは彼以前の感情を欠く知的遊戯としての芸術に異論を唱え、芸術作品は感情に訴えねばならないとする。ワイルドは、「芸術は生命それ自身であり、死については何も知らない。芸術は絶対的真理であり事実に関心を配ることはしない。」と芸術至上主義を唱える⁽⁸⁾。詩人には芸術的瞬間しかなく、美の世界しかない。ワイルドはキーツに共鳴して「私は大衆に対してもまた存在するいかなるものにも敬意を払わない。私が敬意を払うのは永遠なる存在、偉大なる人の追憶、美の原理に対してである。」と言うが⁽⁹⁾、これはイギリス文芸復興の根幹をなしていると言えよう。

ワイルドはイギリスにおける文芸復興について述べた後、アメリカ人に対しても同じように文芸復興に取り組むべきだと言う。ワイルドは、イギリスの文芸復興の完成をアメリカ人に期待するのである。いささかアメリカ人の心を開く

すぐるような言葉であるが、アメリカ・アメリカ人には何かギリシア的なところがあると言う。アメリカは若い。飢えた世代がアメリカ人を踏みつけることはない。また美の荒廃ゆえにアメリカ人を嘲笑したりすることはない⁽¹⁰⁾。独立以来わずか100年位しか経過していないが逆に伝統のなさがアメリカ人の自由と強さの源であるかもしれない。若い国家アメリカに対してワイルドは、芸術作品を模倣するのではなく、芸術精神、芸術態度を吸収すべきであることを強く主張する。

創造への情熱は批判的美的能力を生み出すはずで、それがなければ創造への情熱は単に浪費されるだけにすぎない。アメリカの文学には道徳的意識の強化は必要ではない。ワイルドの芸術観については既に触れたが、詩は道徳的とか不道徳的とかの基準で評価されるべきではない。詩というものはよく書かれるか悪く書かれるかで、それだけである⁽¹¹⁾。実際、芸術における道徳や善悪要素云々は詩人の不完全なヴィジョンを表し、想像的作品が目指す調和のなかに不調和音を示している。すぐれた作品は純粋に芸術的効果を目指すのであり、道徳的要素は芸術には不必要である。ワイルドは再度芸術のための芸術観を聴衆に訴えている。現在アメリカに欠けているものは永続する嗜好の基準と美への感受性である。ワイルドがアメリカ人に向かって芸術のために芸術を愛せよと言う裏にはそれが単に個人のためになるというだけでなく、アメリカという国への評価も関わってくるという考えがワイルドにはあるからである。美と美の創造への献身は国が偉大な文明国であるかの試金石である。芸術は市民の生活を神聖なものにし、民族全体の人生を不滅なものにする。ワイルドにとって美は不死なるものであり、時間によって傷つけられることの出来ない唯一のものである⁽¹²⁾。美は全ての季節にとって喜びであり、永遠なる生命を有するのである。これはワイルドのアメリカ人への期待である。言葉を換えて言えば、今アメリカを支配している物質文明に未来はなく、芸術にこそ永遠な生命が宿り、その芸術創造に励むべきだということである。芸術はまた国家の文明の程度が測られる尺度でもある。芸術は人を殺しはしない。国家の憎しみは文化が最低であるところでは最も強い、ともワイルドは言うが⁽¹³⁾、真の芸術が存在しない国はまさしく野蛮な国で、そこでは人間は真には存在していない。芸術は国

家が征服されても敵から奪われることはなく、ただ服従によってしか得られない帝国である。アメリカ人もイギリスの文芸復興精神を吸収し、真の芸術を自ら作ることにできる国民である。そのためには労働者の喜びの表現である装飾と個性の表現が必要で、模倣ではなく個性の表現こそが人生の本質であり、芸術の源であるとワイルドは説く。人々の心を喜ばすために人々の喜びのために人々の手によって作られる芸術を創造することをアメリカ人には行わねばばらばら。芸術は人生における人々の楽しみの表現である。芸術が神聖にすることが出来ないものは人生にはない⁽¹⁴⁾。ワイルドは自らがイギリスで行ってきた芸術復興運動を参照にして、聴衆に芸術と人生の関係をこの講演で述べている。アメリカ到着1週間後の講演題目は決してアメリカ人にとって親しみやすいものではなかった。ワイルドは若いアメリカにイギリスがたどってきたように物質主義に未来を築くのではなく、芸術によって国の名声を不滅のものにしなければならないと言う。芸術創造はまた人間が真の人間たる証でもある。人間は創造することにより主体的な生を生きることができるのである。個々の人間の主体性、個人主義によって人間はより充実した生を送れる。これをワイルドは講演で聴衆に訴えたかった。ワイルドの講演については翌日の各新聞で批評されている⁽¹⁵⁾。それを見てもアメリカのマスコミは必ずしもワイルドの講演を好意的には見ていなかった。とにかく一夜にして1000ドル以上の利益を上げた講演である。アメリカ側の主催者モース大佐はますます講演に熱を燃やす。ワイルドは以後全米の各都市とカナダで100回以上もの講演を行うことになるが、それは果たしてアメリカ人がワイルドを理解していた結果であったろうか。むしろワイルドを利用した金稼ぎ的要素が大きかったのではないか。アメリカ人にとって審美主義はまだ遠い世界の出来事であった。

2. 「住宅装飾」

この講演は1882年5月11日にニュー・ヨークで行われ、ワイルドの唯美主義が力強く訴えられている講演である。ワイルドは、最初の講演「イギリスの文芸復興」でイギリスにおける文芸復興について述べたが、この講演は具体的に住

宅装飾についていかに美しくあらねばならないかを説いた講演で、いわばワイルド美学の実践編といってもよいだろう。

ワイルドは、アメリカは美的感受性に関してはイギリスよりはるかに遅れていると考える。イギリスは美であふれている。しかしアメリカには芸術は皆無である。ワイルドにとってアメリカで彼が見た芸術はブロードウェイや五番街にあるドーリア式様式の円柱とコリント様式の煙突の煙の出口だけである。アメリカ人に高尚な想像力あふれる芸術は期待できず、むしろ日用品を神聖なものとする芸術が必要である。ワイルドは、日常生活においてアメリカ人がいかに美に無関心であるかを指摘する。ワイルドは職人を重視するが、それは自己の個性の表現こそが芸術にとって欠くべからざる必須条件であるからである。その個性の表現とはまた美への飽くなき追求に他ならない。ところがアメリカ人は職人を十分に尊敬していない。日常生活に美を求めてこそ人々の生活は充実したものとなる。その充実した人生の基盤を形成するのは職人である。ワイルドは彼の唯美主義観に基づきアメリカ人の日常生活における美的生活を力説するが、いかせんアメリカ人に美的センスはない。芸術は人々が受け入れたり捨てたりできるものではない。芸術は「人間生活にとっての必需品である⁽¹⁶⁾。」ワイルドがアメリカの都市を訪問したとき彼は「非常に悪く行われた仕事⁽¹⁷⁾」を見た。たとえばそれはまずい壁紙のひどいデザインであったり、色彩のカーペットであったり、ばす織りソファであった。アメリカ人の美への無関心振りにワイルドは気が滅入った。意味のないシャンディリア、機械で作られた家具、機械製作の装飾で飾られた小さな鉄製ストーブを特にワイルドの批判的であった。骨壺装飾の贅沢品もあった。このようにワイルドは美的センスに無頓着のアメリカ人に驚きの念を表すが、それは合理的なデザインに基づく「誠実な職人」がアメリカにはいないからである。彼らが作るものは年月と共に美と価値が増すが残念ながらアメリカには美を作る誠実な職人がいない。アメリカ人がなすべきことは「芸術家」と「職人」を一緒にすることである。職人は芸術家ともにしなければ生きることも栄えることもない。両者を切り離せば芸術からすべての精神的動機が奪われることになる。このようにワイルドは、芸術家と職人の共同作業から美は生まれるとの持論を説くが、これは「芸術と職

人」でも繰り返される。芸術家にはヴィジョンと夢があり、職人はそれを具現化する役を担う。芸術家のヴィジョンを実現するのが職人であり、両者の協力なしには美は生まれてこない。芸術家の高尚な美しいデザインは単なる空想や白昼夢の結果ではなく、長く時間をかけた楽しい観察という習慣の蓄積として生まれてくるものである。残念ながらこれは教えることはできない。ただ美しい部屋と満足する色彩に慣れている人だけが正しい考えを得ることができる。いかに美に囲まれた生活が人々に美的センスを植え付けることが出来るかをワイルドは強調する。このように日常生活においていかに美が必要かをワイルドは説くのであるが、それに付随する根本的な疑問はなぜ美が必要かである。それに対するワイルドの答えは、美的生活を送ることにより人生に喜びが生まれてくるからであるというものである。美的生活により人生がより楽しく、より充実した価値あるものとなる。ワイルドの唯美主義の究極の目的はいかにして限りある人生を豊にし、生きるに値するものにするかである。ワイルドがアメリカの諸都市を訪れたとき、彼の目に映るものは美とは全く無縁の人々の生活であった。確かにアメリカは南北戦争を終え、好況時代にあり、物質的繁栄に酔っているところがあった。しかし、人々は精神的な、美的な生活には無頓着な生活をしているだけで、ワイルドから見ればアメリカ人は真の意味において「生きている」ということではなかった。もっとアメリカ人は美を愛さねばならない。美を愛することによって人生をより生きるに値するものにしなければならない。それを教えにワイルドはアメリカに来たのである。アメリカの男性の衣服についてもワイルドは高尚性がなくなっていると指摘する。それに反し、イギリス18世紀の衣服は優雅で優美であり、怪奇なもの異様なものは全くなく、調和と美に満ちていると言う。アメリカでワイルドが見た唯一の立派な服装の男性は西部の炭坑夫であった。彼らは、縁の広い帽子、美しいひだのついた外套、それに靴、楽しいもの美しいものしか身につけていないのである。美と実用性を重視するワイルドの考えの具体的な表現を彼は炭坑夫に見出したのである⁽¹⁸⁾。

それでは美的感受性に欠けるアメリカに必要なものは何か。それは芸術を教える合理的な学校である。ものを作るのは職人である。その職人に立派な作品

の見本を示し、それによって職人は素朴で真実の美しいものが何であるかを知るに至る。そのためには博物館の設立も必要である。博物館においてこそ洗練と教養ある人は美に仕える職人とじかに出会うことができる。職人の高尚性を知るに至る。アメリカ人の美的感受性欠如の例としてアメリカ人は白い壁を持ちすぎることをワイルドは指摘する⁽¹⁹⁾。もっと多くの色が必要であるし、はっきりとした配色もない。また芸術家も単純に有益なものだけを装飾する必要がある。アメリカの芸術においては水をいれる容器のようなものを装飾する試みはない。ワイルドは、普通の水入れや水差し以上に醜いものを知らないとアメリカ人の美への無関心に驚く。夕食の皿を日没で飾ったり、スープ皿を月光で飾ることもしない。食事をするときに快適な気持ちになるような食器を作らねばならない。芸術は単純であるべきで、頭脳よりは心情にもっと訴えるべきである。芸術鑑賞は入念な学問体系によっては得られない。芸術には立派な健全な雰囲気が必要である。残念ながら今のアメリカには芸術を生む素地がない。人々の生活をもっと美で飾ることによって人々の生活は潤いあるものにしなくてはならない。もっと美しいものを作ることが必要である。ワイルドは、アメリカ人にはほかのどの国以上に美しい芸術を作る材料はあると言う⁽²⁰⁾。たとえばアメリカにはギリシア人が使用した以上に立派な大理石がある。この大理石は高尚な職人によって使用されるべきである。あるいは木彫がアメリカ人の家庭には全く欠けているが、装飾芸術のなかで最も単純な木彫をもっと利用すべきである。また宝石類に関しても着想が下品で俗悪である。山や河に見いだされる宝石からはもっと良いものが作られなければならない。あらゆる美を作るのは職人である。機械化された大量生産によっては芸術作品は生まれてこない。職人の作る物の中にこそ真の独創的な美は生み出され、その個性あふれる美を人々は高く評価しなくてははいけないのである。

芸術はなぜ必要なのか。それは芸術のもつ普遍言語によって人々が兄弟意識を共有できるからである。それにより人間が互いに争う戦争はなくなる。だから子供が美しいもののなかで育てば子供は美を愛するようになり、醜いものを嫌うようになる。すべてが優美で上品であれば優しさと繊細な作法が身に付く。だから子供達に手を使って人類に奉仕するように教えることが必要であ

る。子供には小さいときから美しい物に触れさせる必要があり、美しい物は美しい心の人々に生じさせる。学校には工作室を設け、一日に一時間を単純な装飾芸術にあてればよい。こうして職人が育成され、最終的には彼らが国の顔を変えていくことになる。フィラデルフィアにはそのような学校があった。子供達はそこで芸術の誠実さを学び、芸術上のうそつきを嫌うようになる。必要なのは人生に付け加えられる何か精神的なものである。芸術が神聖化できないほど卑しいものはなにもない⁽²¹⁾。

アメリカ人への美への目覚めと美が日常生活へ何をもたらしてくれるのか、また幼い頃からの芸術教育の重要性を指摘したこの講演は審美主義者ワイルドの一面を我々に見せてくれる。ワイルドから見れば新大陸アメリカは余りにも美とは無縁な国であった。しかし、美に包まれ、美を目の前にした日常生活を送ることにより、アメリカ人ですらより価値ある生を享受できる。その美的生活の意義をワイルドはこの講演で主張している。

3. 「芸術と職人」

ワイルドにとって自己実現を目指す個人主義者は美への情熱に燃えた人で、そのような人こそが真の職人である。ワイルドは職人と芸術家を結びつけることによって彼以前の特権的な芸術家とは一線を画している。「芸術と職人」は1882年1月17日、フィラデルフィアで書かれたが、唯美主義者ワイルドの芸術・職人観が簡潔に表れている講演である。

ワイルドにとって美とは実用性を有する。美と実用性との間には対立があると思っている人がいるが、決してそうではなく実用性は絶えず美にある。美が実用性に欠けるときの美は単なる抽象的な美で、人々に真の幸福をもたらすことはない⁽²²⁾。これはワイルド以前の一般社会から遊離した特権的な芸術とは異なる芸術観と言えよう。美的生活はたいして重要ではないと主張する人はほとんどいないと思われるが、たいていの文明国はあたかも美的生活が重要でないかのごとくふるまっている。芸術の意味する美は人間生活の単なる偶然な物ではなく、美のない生活は人間以下であることを意味する。言い換えれば美的

な人生と無縁な者は動物と同じ生き方をしているのである⁽²³⁾。美というものは人間を人間たらしめる重要な要素で、美を欠いたとき人間は人間であることを止めてしまう。ところが現在のアメリカはどうか。商業的精神がはびこり、美は遙か彼方に追いやられている。現代アメリカの生活を美しくするデザインが必要である。職人には輝かしい高尚な環境を与えねばならず、それによって堂々とした素朴な建築、男女の輝かしい素朴な服装が生まれてくる。芸術家は本来は人生論に関わるのではなく人生そのもの、美しさと関わっている。ここでワイルドは色彩を強調する。ワイルドにとって美を構成する要素は色彩と構成である。アメリカ人が愛好する白一色の壁のようではなく、美しい色彩とはすべて等級的に配列された色彩である。つまり別の色彩に移っていくように見える色彩である。濃淡のない色彩は調和のない音楽のようである⁽²⁴⁾。ワイルドはアメリカ人が白色を多用することを批判していたが、単なる一つの色だけでは美は生まれてこない。様々な色彩を有効に使用することによって美が際だってくる。職人は世界で最上の装飾の芸術の見本を傍らに置くべきで、それによって職人は趣味の規範と基準を生み出すことが出来る。職人にはデザインと色彩を教える必要があり、いかに美しい色彩が等級的に配列された色彩であるかをまたげばばしい色彩は俗悪の本質であることを教える必要がある。真のデザイナーとは色彩においてデザインし、色彩において創造し、色彩において考える人であって、最初にデザインを描いてそれからそれに色彩する人ではない。ワイルドはデザインが美を作るにあたって最も重要であると考えている。ワイルドは言う、「立派なデザインから何も奪うものはないし、何も付け加えるものもなく、それぞれの小さなデザインは全体の効果にとってベートーベンのソナタにとっての音楽の音色や弦同様絶対に必要で極めて重要である。⁽²⁵⁾」ところがワイルドがアメリカのデザイン学校で見たのは若い女性が丸い大皿にロマンテックな月光の風景であったり、また別の女性がディナー皿ひとそろいを最も目立つ色彩で塗る姿であった。若い女性が月光の光景や日没画を描くのはいいが、ディナー用の皿に描いてはいけない。彼女たちは間違った主題を間違った材料に描いていたとワイルドは言う⁽²⁶⁾。これはなぜかと言えば彼女たちはすべての材料と生地には独自の特質があることを教えられていなかったのであ

る。あるものには適当なデザインは他のものにはふさわしくない。使用の用途によってデザインは当然異なってくる。

市民の自身の手によって市民の喜びのために美しい芸術を作る必要があり、アメリカには大きな芸術運動の基本的な要素があると、ワイルドはアメリカにも美を作る下地はあることを述べる。ワイルドは聴衆を喜ばすために美しい高尚な芸術には最初に汚れない健全な環境が必要でイギリスと違いアメリカにはその環境が整っている。次に必要なのはたくましい、賢明な健康な体格をした男女である。最後に個人主義感覚が必要となってくる。この最後の個人主義はワイルドが最も重要視するものであって、芸術の本質である⁽²⁷⁾。それは可能な最も高尚な方法で自らを表現したいという人間の欲求である。ここでワイルドは極めて政治的な発言をしている。つまり世界の最も壮麗な芸術は常に共和国から生まれてきたと言うのである。具体的にはアテネ、ヴェニス、フローレンスである。これらは皆共和国で、王はいなかった。しかしその芸術は誠実で高尚で単純素朴であった。これに反し王政たとえばフランスのルイ14世の場合、その芸術はけばけばしい金箔の家具であり、非現実的な怪奇な芸術だった。富める者に美しいものを所有してほしくないが貧しい者に美しいものを作ってほしい、とワイルドは言う⁽²⁸⁾。人々の高尚な美しい生活を高尚に美しく表現するのが真の芸術である。このように考えると芸術というものは偉大な国家の精神がその最も高尚な形で見出されるのである。権力者には美を見る目がないとワイルドは言いたいのである。個人主義に関してワイルドは「社会主義と人間の靈魂」の中で次のように言っている。「他方、ある社会もしくは社会の強力な一部、またはなんらかの政府が藝術家になすべき仕事を指令しようとするときはいつでも、「藝術」はすっかり姿を消してしまうか、でなければ紋切り型になったり、低い下劣な形の技能に墮してしまう。藝術作品は無二の気質の無二の成果である。その美しさは作者が作者その人であるという事実由来する。…まことに、藝術家が他人のもとめるものに注目し、その要求に応じようとする瞬間、藝術家であることをやめて、退屈なまたは人を楽しませるだけの職人、正直なまたは不正直な証人となる。…藝術は、これまで世人の知ってきたもっとも強烈な形の個人主義である。それこそこれまで世人の世が知ってき

た唯一のリアルな形の個人主義であるといいたい。⁽²⁹⁾個人主義は社会主義を通して得られるものであるともワイルドは言うが、一部の恣意的な権力からは真の美は生まれてこない。真の芸術家の表現する芸術は権力者が権力を誇示するためであってはならない。では何が芸術の表現対象となるかと言えば、それは素朴な日常生活に見られる対象である。たとえば井戸から水を汲む女性とか草刈りがまを手に身をかがめている男性である。幸いアメリカは王政ではない。だから芸術家の対象となるものがあふれている。普通の男女、花、畑、丘、山、これらこそがアメリカ芸術が表現する対象である。重要なことは職人と芸術家を切り離してはいけないということである。両者を一緒にして初めて美が生まれる⁽³⁰⁾。芸術家は理念を、職人はその理念を実践する。美は芸術家と職人の共同作業の結果である。それだけに終わらない。ワイルドは、偉大な国家の歴史はその芸術の中で芸術によって生きていくと言う。まさに真の芸術の有無が国家の名声を左右する。人間の高尚なものすべて、森羅万象の美しいものは芸術によって永遠化される。作る人にとっても使用する人にとっても喜びを伴わないものは芸術作品とは言えない。人々の心を喜ばすために人々の手によって芸術が作られるのを見たいともワイルド言う。現在のような大量生産、物質主義万能の時代にあっては個々の職人が物を作るということは現実離れしている。しかし大量生産物のどこに美があるというのか。ワイルドにとって美とは個人の職人の手によって作り出されるものである。アメリカも金がものをいう物質主義の時代である。そのような物質主義的拜金主義がはびこる世界に美は存在し得ない。しかし、人々の考え次第では美的な生活は享受できる。外的な美を作ることによって人間は内的にも充実した美しい生活を送れる。ワイルドが幾度となく繰り返して主張するのは外的な美の創造による人間個人の内面的な変容である。個人が変われば国も変わる。美にあふれた国家は永遠なる名声を得る⁽³¹⁾。唯美主義者ワイルドの主張は単に美を創造するだけではなく、美の創造は共同体の、国家の名声にも大きな影響を及ぼすのである。「芸術と職人」の最後でワイルドはオックスフォード大学時代のエピソードに言及している⁽³²⁾。それはラスキンの講義についてであった。彼は、若者がクリケットや船遊びに体力を使っていることに対して不満を述べ、若者は他人に良いことをすること

に専念すべきだと言う。すべての労働には何か高尚なものがあるというのがラスキンの持論である。ラスキンはオックスフォードの近郊の村人が使用するために沼地を横切る道を作る作業に取り組み、ワイルドたちもその作業を行った。これは人生の高尚な理念であり、ワイルド達は高尚な友情と高尚な芸術によってお互い結束し、「美しい仕事」を行うことを決めたのである。アメリカ人も高尚な仕事が出来ないはずはない。彼らにも実践する芸術があるのだ。労働から離れると見者は力を失い、真理を失う、とエマーソンの言葉であるが⁽³³⁾、個々人の労働はそれ自体労働者に生の充実感をもたらすものなのである。単調な生のリズムを打破するのは労働によってであり、労働こそが生の証ともなりうる。もちろんこの労働は額に汗を流して取り組む肉体労働だけをいうのではない。芸術家が美を作ろうとする行為も又一个の労働である。美を作り出すために芸術家はいわばその行為に全生命を投げ出している。そこに芸術家の生きる価値がある。芸術は、死が傷つけることのできないものである、とワイルドは言うが、芸術はそれを作った者が死してもなおかつ永遠に生き続けるものなのである。

「芸術と職人」は「住宅装飾」と一部重複する内容の講演であるが、美を作り出すためには芸術家と職人の協同作業が必要であるという主張はワイルド以前の特権的な芸術のための芸術観とは一線を画するものである。そしてより一般大衆に密着した芸術創作を訴えている点で新しい審美主義の一面を提示していると言える。権力者の求める美は美ではないと激しい口調で権力者を弾劾するワイルドに時代の反逆者としてのワイルドを見ることができる。物質主義万能のアメリカ批判はまた同じような状況にあるイギリスへの批判をも示唆し、読みようによってはかなり物議を醸し出しそうな内容となっている。

4. 終わりに：「1848年のアイルランド詩人たち」－もう一つのワイルド－

ワイルドの3題のアメリカ講演を見てみると、ワイルドはその選択に苦心したように思われる。ともかく南北戦争後の好況時代を迎えたアメリカでワイルドの言う「審美主義」なる意味は一般大衆にはなじみの薄い言葉であった。ワ

イルドは最初審美主義がいかなるものであるか、それがいかにしてイギリスに発生したかを述べることにした。なにしろ審美主義などという言葉を目にしたことのないアメリカ人相手の講演だったからいかにして彼らに審美主義を説明するかがワイルドの最初の講演の目的だった。聴衆は“Renaissance”なる言葉が何を意味するのか理解できなかった。驚くべきは花から作ったプディングだとか、なかにはシルクハットからウサギが出てくるような手品まがいの曲芸を期待する者もいた⁽³⁴⁾。一般アメリカ人の理解はそれぐらいでしかなかった。講演のそもそものきっかけはワイルドを諷刺したオペラ『ペーシャンス』で、そのオペラをよりよく理解してもらうためにワイルド自身を利用したのであった。ダンディなワイルドは講演先で茶化されることもあった。そのひとつはハーバード大学での講演である⁽³⁵⁾。ワイルドを笑い物にしようと学生60人が前列に陣取り、ワイルド的なダンディな格好でワイルドの演説を待ったのである。ワイルドはヤジや奇声には全く動じることなく、彼らを見て微笑むだけであった。その微笑みが会場全体の笑いを誘い、学生達は逆に聴衆の笑いの対象になってしまったのである。ワイルドは1月9日のアメリカ最初の講演以後全米とカナダを回り、講演を続けた。全米100都市以上での講演実績はワイルドの人気の程をよく表しているが、それがワイルドの講演を聴きに来るためであったかどうかは疑わしい。しかしワイルドの講演はたとえ一般大衆には理解の出来ない内容であったとしても、その講演が審美主義という運動の宣伝に一役買ったということは言えるだろう。人生は金だけではない、物だけではない。それとは違った人生もある。美を作り出すことも人生の一部である。それにより個々人の生はより充実した価値ある生となりうる。それを声高らかに訴えのがワイルドの講演であった。

ワイルドは一年にも続くアメリカ講演旅行で何を発見したのであろうか。なるほど彼は「イギリスの文芸復興」「住宅装飾」「芸術と職人」の講演によって、ワイルドらがイギリスで何を行っている審美主義運動の一端を説明することはできた。その内容が一般人に理解出来ようが出来まいが、美に生きる見本をワイルド自身は自ら実践してみせた。ワイルドを模倣する人が現れたのは何ら不思議ではない。「美の伝道師」としてワイルドは精力的にアメリカ及びカナダを

駆け回るが、それはアメリカもカナダも美に飢えていたからだったのではないだろう。当時の新聞や新聞の漫画でワイルドを諷刺するものが多かったことはワイルドの「審美主義」は一般のアメリカ人にはせいぜい諷刺、笑いの種でしかなかったことをはっきりと示している。*New York Tribune* は「ワイルドの我が粗野な国への伝道活動は失敗であった」と書き、*St. James Gazette* は、「ワイルドはアメリカから笑いを浴びせられて追い返された」と書いた⁽³⁶⁾。ワイルドのアメリカ講演旅行が成功か不成功かは断言できない。ただワイルドは幾分商業的に利用されていた感は否定できない。ワイルド側が講演旅行から稼いだ総額は4,000ポンドで、そのうちの1,200ポンドがワイルドの取り分であった⁽³⁷⁾。しかしその収益もワイルドの出費を数百ポンド超えるもので、しかもその収益はワイルドの半年のアメリカ滞在からの収益であった。ワイルドは12月までアメリカに滞在するので、彼の収益はもっと多かったはずであるが、ワイルドの出費も多かった。後半は収入も減少していったことを考えるとワイルドは財をなすほどの収益を得ることができなかつたようである。

ワイルドはアメリカ講演を通して何を得たのか。「ワイルドはアメリカを変えはしなかつた。しかし、アメリカがワイルドを変えた。」と Lewis と Smith は言っている⁽³⁸⁾。ワイルドは、帰国に際し、彼の見せかけや不相応な気取った態度を船外に捨て、気取った態度や話し方を止め、審美主義運動家としてのオスカー・ワイルドを拒絶する気でいた。そして彼のトレード・マークの半ズボンをあきらめさえしていた。すっかり月並みの19世紀の紳士として帰国したと言う人すらいた⁽³⁹⁾。ワイルドは審美主義に見切りをつけたのであろうか。そうではないだろう。なぜなら帰国後のワイルドの創作意欲は衰えることを知らず、彼は次々と後世に名を成す作品を発表するからである。Lewis と Smith と違い、私はもし「アメリカがワイルドを変えた」としたら、それはワイルドがアイルランド人としてのアイデンティを再確認したことであったと考えている。講演中、それはワイルドがしばしば母国アイルランドとアイルランド人に触れていることから理解できる。たとえば1882年5月6日に二人のアイルランド人がアイルランド自治扇動の結果としてダブリンで殺害される事件が起こった。それに対してワイルドは、次のように言った。

自由が血で塗られた手で来るとき、自由と手を結ぶことは難しいのです。イギリスは責めを負うべきです。イギリスは7世紀もの不正の実を手に入れているのです⁽⁴⁰⁾。

あるいは南軍大統領ジェファーソン・デーヴィスに会いに行くとのうわさが流れているがと記者から聞かれるとワイルドは、

私は南部連邦長に対して熱烈な敬服を抱いている。私は彼に会ったことはないが、私は彼の生涯を非常に注意を払って見守ってきました。彼の敗北は、彼自身の理想をあのように見事に雄々しく訴えたのだから、彼の訴えの長所が何であれ必ずや同情を呼び起こすに違いありません。頭では勝者の成功を認めるかもしれませんが、心は確かに戦いで亡くなった人と共にあるのです⁽⁴¹⁾。

と述べた後、更に次のように言葉を続け、南北戦争で北軍に屈した南軍をアイルランドに重ね合わせている。

南北戦争での南部の立場は私の考えでは今日のアイルランドの立場と非常に似ています。それは帝国が分割されるのを見る闘争ではなく、アイルランド国民が自由になるのを見、自らが快く選びイギリス帝国に不可欠な帝国の一部としてのアイルランドを見る闘争でした。他国民の側に見られる膨大な軍隊と傲慢な野心のこの時代にあって偉大な帝国を分割することは分裂した国家の国民を共同体の展開の中で弱々しい取るに足らない地位に委ねることなのです。しかし、進歩のために最大の結果を得ることができる前に自由と自治を持たねばなりません。これが南部の人たちについての私の感情です。ちょうどそれが私自身の国民、アイルランド人についての感情であるのと同じように。私はジェファーソン・デーヴィスを訪問するのを楽しみにしています⁽⁴²⁾。

その後ワイルドはジェファーソン・デーヴィスと面会するが、彼の人柄を褒め称えた後

アイルランドの我々は帝国に対して自治の信念のため、中央集権主義への独立のため、南軍が戦った信念のために戦っているのです。

と述べている⁽⁴²⁾。更に次のように述べて、南軍への強い同情の念を表している。

非常に大きな信念を抱いた指導者に会うことは計り知れない興味と喜びとするところでした。なぜなら実際は失敗というものはあるかもしれないが、理念的には失敗など全くありえないからです。デーヴィス氏と南軍が戦争のために戦った主義が敗北を被ることはありえないのです。私はデーヴィス氏の著作を読みました。それはすぐれたものです。もっともヨーロッパの我々にとっては軍事作戦行動の入念な詳細は時には少しばかりやっかいなのですが。しかし、彼が南部連盟の信条について詳しく述べる箇所があり、それはこのうえなく熱烈な興味と楽しみをもって我々によって読まれていました。パトリック・ヘンリー、トマス・ジェファーソン、ジョージ・ワシントン、及びジェファーソン・デーヴィスを輩出した国について気高く考えないことは不可能です⁽⁴³⁾。

また、ワイルドはある記者から自由主義者か保守主義者か聞かれたことがあった。それに対してワイルドは、

そういったことは私には全く興味がありません。私はただ文明と野蛮の二つの言葉を知っているだけで、私は文明の側にいるのです。

と政治的立場に関しては言明を避けている⁽⁴⁴⁾。さらに興味あるエピソードがある。ワイルドを乗せた列車がとある小さな駅で停車したとき、記者が乗り込

み、ワイルドに“Sonnet to Liberty”が彼の政治的信条を表しているのかと質問したところ、ワイルドは、「もし私の政治的信条を知りたいければ“Libertis Sacra Fames”を読んで下さい」と答えている。その詩はすべての人が王のようである共和主義国家に寄せる詩であるが、それは自由よりも専制政治を擁護している詩であり、ワイルドの本音がどこにあるのかは不明な詩である。更に記者はワイルドの人生に話題を変えるとワイルドは、彼の生まれと家系にはほこりを感じていると言い、次のように言葉を続けている。

私は芸術生活と機会のためにロンドンに住んでいます。アイルランドには文化が欠けるところは何もありません。しかし、アイルランドの文化はほとんどすべて政治に吸収されています。私がアイルランドに留まっていたなら、私の生涯は政治的なものになっていたでしょう⁽⁴⁵⁾。

また、産業と労働について聞かれるとワイルドは次のように答えた。

貧困と過激主義の間には何ら関係はありません。しかし、手工芸品と共和主義との間には関係があります。どんな手工芸品にでも取り組めばあらゆる共和主義の基調である独立感が生まれてくるのです⁽⁴⁶⁾。

以上は1882年のアメリカ講演中のワイルドの言葉であるが、政治的には全く関係がないような講演を続けていながらそれでもワイルドはアイルランド人としての意識を持ち続けていたことが理解できる。何よりもワイルドは自治独立を奪われたアイルランド人として反権力への強い姿勢を示していることは興味深い。

しかしながらアメリカ講演中、ワイルドの母国アイルランドとアイルランド人への最も強い思いが吐露された講演は1882年4月5日のサンフランシスコで行った「1848年のアイルランド詩人たち」であった。講演はサンフランシスコ在住のアイルランド系アメリカ人の有力者たちの要請によるものであった。なぜワイルドはサンフランシスコで愛国的なテーマで講演を行ったのか。まずサ

ンフランシスコにおけるアイルランド人の数である。ワイルドのアメリカ訪問2年前の統計では市の白人人口の約37%がアイルランド人であった。これはアイルランド人がサンフランシスコで最大の民族集団であることを示している⁽⁴⁶⁾。1859年にはアイルランド人はサンフランシスコで銀行を持った唯一の民族であった。James Phelan 設立のアイルランド貯蓄・融資銀行のおかげでアイルランド人は事業や産業に従事できた。1875年のサンフランシスコ商工人名録はアイルランド人の成功を証明している。アイルランド人の事業主が人名録を圧倒的に占めているからである。サンフランシスコにおけるアイルランド人の経済的成功は1849年のゴールドラッシュと無縁ではない。金を掘り当てたアイルランド人はそのお金を土地、農業、酪農、家畜飼育の再投資し、彼らの経済的基盤を徐々に強化していったからである。サンフランシスコの土地を切り開き、作物栽培を最初に行ったのはアイルランド人であった。ワイルドがサンフランシスコを訪れた1882年頃までにサンフランシスコのアイルランド人は経済的に主導権を握り、財界でも重要な地位を占めていたのである。政界においてもサンフランシスコのアイルランド人は他の民族を圧倒していた。例えば1867年には Frank McCoppin はサンフランシスコ市長に選ばれている。また David Broderick は1851年には上院議長になっている。このようにサンフランシスコのアイルランド人は政治的にも経済的にも徐々に勢力を得、サンフランシスコでは州を代表する民族集団となりつつあった。このような状況のなかでのワイルドの「1848年のアイルランド詩人たち」と題する講演である。弥が上にもサンフランシスコ在住のアイルランドの熱を煽ることは疑いなかったテーマである。その講演はこれまでの唯美主義宣伝の講演とは異なり極めて政治色が強く、イギリスからのアイルランドの解放・自由を歌ったアイルランドの詩人たちへの熱情的な共鳴に満ちたものである。100を超えるアメリカとカナダでの講演旅行中この講演ほどワイルドがアイルランドのイギリスからの解放とアイルランド人詩人たちへの思いを激しい感情をこめて述べた講演はない。この講演ほどワイルドが愛国的なアイルランド人としての姿を見せた講演はない。それほどこの講演はアメリカ旅行中では異色の講演である。それではその講演はどのような内容の講演だったのか。

講演はいきなり「イギリスに占領されて以来アイルランド人には国民的な詩は全然ない」で始まる。「イギリスの占領」と講演の出だしからイギリスによるアイルランド併合を聴衆に訴える。そもそもワイルドが「1848年」と特にこだわったのはなぜだったのか。「1848年」には特別な意味があったのか。それは1845年から始まったジャガイモの胴枯れ病による全土を襲った飢饉が発端である。ジャガイモを主食としていたアイルランドは大飢饉に襲われ、それに追い打ちをかけるようにチフスの発生が更に事態を深刻化させた。1949年までに100万人の死者を出し、難を逃れて100万人がイギリスや北米に移住し、飢饉以前は800万人の人口が1911年には410万人まで減少した。この大飢饉解決のためにイギリス議会に経済政策が青年アイルランド党の指導者たちによって出されたが、認められず、党員たちは自らの政府を樹立するために1848年に武装蜂起した。結局この蜂起は失敗に帰し、有力者はアメリカへ逃亡した。「1848年」はアイルランド人にとっては自治回復の象徴となる記念すべき年であったのである。アイルランドの歴史はイギリスによる併合とイギリスからの解放闘争の歴史である。ワイルドの講演は、それゆえ、見方を変えれば単なる講演ではなく、ワイルドのイギリスへの武装蜂起擁護とも読める講演である。それを訴えるかのようにワイルドは「(アイルランドは) 不当に奪われたあの立法上の独立という権利を得るまでは仮にもそのような詩を持つ機会などいささかもありません」と言う⁽⁴⁷⁾。ワイルドの胸中からイギリスに併合され屈辱的な自治剥奪のアイルランドが決して消え去ることはない。ワイルドは一アイルランド人愛国者としてイギリスに併合されたアイルランドへの憂慮の念を表し、どんな専制政治も殺すことが出来ず、またどんな刑法も扼殺できない芸術、詩芸術がアイルランドにはあると言明する⁽⁴⁸⁾。これは「芸術と職人」の講演を彷彿させる言葉である。アイルランドの詩・芸術は「民族の至高の勝利のひとつ」であり、アイルランドの詩人は「アイルランド人の生命の血、生き血であり心臓の血、心血」⁽⁴⁹⁾であったとワイルドは強い口調で述べる。ワイルドは美しい、洗練された魅力のある詩人たちには関心がなく、国民感情を全面的に表す、アイルランドの自由のために歌った詩人たちを激賞する。1848年の詩人たちについてはワイルドは特別の尊敬と愛情を寄せている。彼らはすべて1848年の武装蜂起に加

わった詩人である。スミス・オブライエン、ジョン・ミッチェル、ジョン・サヴェッジへのワイルドの共鳴は情感溢れるものとなっているのは極めて印象的である。彼らはいずれも反逆罪に問われ、遠くタスマニアへ流刑されたが、脱出したり、アメリカへ逃れたりしたアイルランドの闘志である。興味あるのはサヴェッジである。ワイルドは講演のなかでサヴェッジにニュー・ヨークで会ったと言っているが、サヴェッジは1848年の蜂起後アメリカに逃れ、秘密結社フェニアン党员となった急進的な人物である。ワイルドが彼と会ったときどのような会話を交わしたのかは記録に残っていないが、ワイルドの政治的スタンスを考えると二人の出会いには様々な推測を産みださずにはおられない。二人は母国の窮状について話し合ったのか。サヴェッジはワイルドにアイルランド独立の援助を願ったのか。資金的な支援を要請したのか。サヴェッジはワイルドのアメリカ講演についてもっと祖国を救うような内容について語ってほしいと要請したのか。憶測は憶測をよぶ。ワイルドが講演で言及した詩人たちは皆「自由の詩が書けるだけでなく、必要とあれば自由のために死ぬる人びと⁽⁵⁰⁾」であった。彼らの詩にはどんな芸術の時代も拮抗できない現実性があるとワイルドは褒め称えている。ワイルドにとってアイルランドの独立のために歌う詩人こそが真の意味での詩人であった。ワイルドが特に激賞するのはトマス・デーヴィスである。彼はアイルランドの亡命者たちが戦争ごっこでイギリス人が敗北をきす詩を書いているのである。またワイルドが暗唱してやまないギャヴァン・ダフィへも共感を寄せている。この他にもワイルドは1848年の武装蜂起と関係のあった詩人やアイルランドの国民感情を歌った詩人の名前をあげている。ワイルドの母も1798年にカトリック教徒解放のために処刑されたシアーズ兄弟裁判を歌った。彼女は“Speranza”のペンネームでアイルランドの独立、イギリスへの武装革命を歌ったが、「革命の年」1848年に「勇氣」と題する詩を書いた。その詩はアイルランド人をフランス革命で王政を打破したフランス人と見なした詩である。

フランス、堂々たるフランスのように、われらは国民のきびしい意志に反対するすべての、すべての者をその部署から一掃しよう。プロシアの勇敢

な子らのようにいかなる君主にも屈せず、剣に訴えてもわれらの正しい権利を求めるであろう。…国民の意志にいかなる敵が 敢えて逆らいえようぞ？されば愛国者よ、英雄よ、打て！われらの国のために⁽⁵¹⁾

この詩はアイルランド人に自治獲得を訴える詩である。屈辱的なイギリスによる併合からのアイルランド解放と独立を激しい感情で歌う母の詩を紹介するワイルドに母の闘志への共鳴と万感の思いを垣間見ることができる。講演は「サクソン人はわれわれからわれわれの土地を奪い、これを荒廃させました。われわれは彼らの言語を奪ってそれにもろもろの新しい美を加えた」で終わり、アイルランドを併合したイギリス批判と屈辱的な併合にあってもなおかつ優れたアイルランド人の芸術精神を称賛している⁽⁵²⁾。イギリスによる併合下にある母国アイルランドによせるワイルドの愛国心は激しい。「されば愛国者よ、英雄よ、打て！われらの国のために」を感情をこめて朗読したとき聴衆からは拍手が起こり、若い女性が香りのよいスマイルの花束を持って壇上へ上がると聴衆はそれに大きな拍手を送った。ワイルドは微笑み、会釈してお礼を述べた⁽⁵³⁾。講演「1848年のアイルランド詩人たち」は上記に挙げた3題の講演とは全く内容の異なる講演である。一方では審美主義を唱え、他方ではアイルランド独立に共鳴する講演を行うワイルドの真意はどこにあったのだろうか。それは単にサンフランシスコ在住のアイルランド系アメリカ人へのリップサービス、シヨーマンシップにすぎなかったのだろうか。アメリカにおいて折に触れ、自治を失ったアイルランドの窮状に熱い思いを吐露するワイルドの姿は我々に一愛国者ワイルドを見せていると考えざるを得ない。19世紀アイルランドでは1919年のアイルランド共和国政府樹立に向けて歴史が大きく動き始めていた。その歴史を概観してみても1801年のイギリスによるアイルランド併合から始まり、20年代のダニエル・オコンネル主導によるカトリック解放運動、45年から49年のかけてのジャガイモ大危機とその結果としてのアメリカへの移民開始、58年のフィニアン団（アイルランド共和主義同盟。IRAの前身）のニュー・ヨークとダブリンでの同時結成、67年のフィニアン蜂起、79年から82年にかけてのチャールズ・パーネルによるアイルランド土地同盟結成、80年代には克蘭・ナ・ゲー

ル（アイルランド人移民とその子孫）によるアイルランド独立支援と続く。ワイルドがアメリカ講演を行った1882年以前はアイルランドはイギリスからの解放を目指し、国民がその闘争に身を投じた、政治的には大きなうねりのなかにあった。その意味で、1850以降のアイルランドのナショナリズムは主として政治的ナショナリズムとイギリスからの政治的独立の獲得に集中していた、と指摘する Una Ni Bhroimeil は正しい⁽⁵³⁾。そのなかでも特筆すべきはパーネルによるアイルランド土地同盟の結成とクラン・ナ・ゲールによるアイルランド独立支援である。アイルランド土地同盟はアイルランドの土地所有制度に反旗を翻した土地戦争で、「アイルランド人のためのアイルランド、人々のための土地⁽⁵⁴⁾」がそのスローガンであった。アイルランドの土地はアイルランド人に帰属すべきだと宣言した土地同盟は小作人への基本的権利—小作権の安定、地代の公平さ、小作権売買自由の保証—をその目的であった。この運動はもともとは1845年から数年間続いたジャガイモ飢饉に端を発したもので、アイルランド土地同盟は結局はイギリスへの抵抗運動の一端で、その運動の最終目標は土地解放と民族の独立であった。クラン・ナ・ゲールはIRAの前身で、アメリカではニュー・ヨークに本部を持つ急進的的秘密結社であり、本国アイルランドの独立のためには武力闘争も辞さない強硬派集団であった。クラン・ナ・ゲールのメンバーは、アメリカにおいては「アイルランドの大義の、最も誠実かつ忠良な友人たち」であったが、実際はアイルランド系アメリカ人のナショナリスト団体の一組織にすぎなかった⁽⁵⁵⁾。このようにワイルドがアメリカへ行く前にはアイルランドでは社会的な混乱が渦巻いていた。それだけにとどまらず、移民先のアメリカでも母国アイルランドを支援する動きが活発に動き出していた。アメリカには大きく分けて4つのアイリッシュ・ナショナリストがいた。それはアイルランド自治支持のナショナリスト、アイルランドとアメリカで社会的・経済的改革を強調するナショナリスト、クラン・ナ・ゲール、それに統一アイルランド人連盟であった⁽⁵⁶⁾。このようななかでワイルドが母国の社会的・政治的諸問題をどれくらい意識していたかは興味あるところであるが、残念ながらそれは断片的にしか我々に伝わってこない。しかし、ワイルドは、1882年4月5日、サンフランシスコで「1848年のアイルランド詩人たち」と題する講演を行い、

しかもその講演でアイルランド独立を歌った詩人たちに強い思いを寄せたことから明らかなように、ワイルドが母国の社会・政治に全く無関心であったと考えることはできない。むしろ、ワイルドは一アイルランドとして強いアイデンティティを持っていた。アメリカ講演旅行はイギリスにおける審美主義運動をアメリカ国民に紹介するためのものであったが、イギリス併合下の母国アイルランドの窮状も彼の脳裏から離れない大きな問題であった。ワイルドが扇動者としてアイルランドにおける自由を求めるカトリック教徒解放に奔走したということではない。しかしアイルランドの自由獲得のために戦った民族運動家ダニエル・オコンネルの甥の子である同姓同名のダニエル・オコンネルへの共鳴が示しているように、母国の自治回復へのワイルドの思いは強かった。美のための美、芸術のための芸術を提唱したワイルドではあったが、政治の問題も絶えず彼にはつきまとっていた。上記の3題の講演を見てもよく見ると随所に政治的なワイルドの姿が垣間見られる。

ワイルドの「1848年のアイルランド詩人たち」は、サンフランシスコ在住のアイルランド人にアイルランド人としてのアイデンティティ感を奮い立たせた講演であった。ワイルド以前にも様々なアイルランド人がアメリカを訪れ、祖国アイルランドの独立を訴えている。例えば「土地戦争」の指導者パーネルは1879年アイルランド議会党の資金を集めるためにアメリカで講演を行った。あるいはフィニアン運動に身を投じた革命家ダヴィッド。彼は大西洋を越え、アイルランド系アメリカ人にアイルランドの土地問題は彼らの援助で解決されると説いた。更に20世紀に入ってイエーツは1903年にアイルランド文芸復興支援の資金集めのためにアメリカを講演している。アイルランドは武器、教会、政党、地下活動の資金のためにアメリカから援助金を必要としていた⁽⁵⁷⁾。アイルランド系アメリカ人はアイルランドにとって貴重な資金源だったのである。アメリカ講演を通して多額の報酬を得たワイルドはどうだったか。ワイルドはあれほどアイルランドのイギリスからの独立に奔走した詩人たちに共感を示したにもかかわらず、アイルランドの独立運動に対して資金援助を行ったという話は聞かない。アメリカ在住のアイルランド人は多額の金を様々な団体に寄付している⁽⁵⁸⁾。しかしワイルドが講演料の一部をアイルランド自治回復のために

寄付したという事実はない。ワイルドは意図的に政治的問題への関わりを避けていたのであろうか。これについてワイルドのアメリカ講演に関してニュー・ヨークの *Irish Nation* 紙は1月14日の記事にワイルドを非難する見出しを付けた。

Speranza's Son

Oscar Wilde Lecture on What He
Calls the English Renaissance

The Utterness of Aestheticism

Phrasing about Beauty while
a Hideous Tyranny Overshadows

His Native Land

Talent Sadly Misapplied⁽⁵⁹⁾

Speranza とはワイルドの母のペンネームで、アイルランド解放の闘志であるが、その息子ワイルドは「恐ろしい(イギリスの)暴政が母国に重くのしかかっているのに美について述べている。」祖国アイルランドはイギリスからの独立を目指して闘争を続けている最中にある。「美」などと悠長なことを言っている場合ではない。それなのにワイルドは祖国の窮状には全く眼中がないような講演をしている。ワイルドの才能は「残念なことに誤用されている。」この記事はワイルドにもっとアイルランド自治回復のために在米アイルランド人に語ってほしいと「美」について語っているワイルドを批判しているのである。Ellmann によればワイルドは在米アイルランドの中に多くの味方を見つけたが、彼らはワイルドの美学には関心がなくワイルドがアイルランド人であることだけが好きであったと言っている⁽⁶⁰⁾。また、ワイルドがミネソタでは「アイルランドの最も高貴な娘たち、1848年の騒然とした時にそのペンが表した作品と高貴な手

本によって愛国心の炎を明るく燃やし続けるために大いに貢献した娘の息子』として紹介された⁶¹⁾。やはりワイルドはイギリスに対して独立闘争を行っているアイルランドからやってきたアイルランド人であったのである。アメリカ人が見るワイルドはともかくもイギリスに併合されたアイルランド人の一人なのである。しかも1870年代から90年代にかけてアメリカではフィニアン兄弟団とクラン・ナ・ゲールの結成、報道面でのアイルランド系新聞の台頭、多くのアイルランド系アメリカ人のアメリカ社会への進出等が相次ぎ、いやがうえにもアイルランド人としてのアイデンティティが強まりつつあった。そうしたなかでの唯美主義宣伝のためのワイルドの講演である。祖国を思えば余りにも無神経と言えば無神経と言われてもしかたのない講演であった。祖国の独立運動に思いを寄せたのかどうかは定かではないが、4月5日の「1848年のアイルランド詩人たち」はそれまでのワイルドの講演内容とは一変した講演であった。祖国の独立のために激しい反イギリスへのエネルギーを詩作に注いだ詩人たちへのワイルドの共感の度合いはただごとではない。「美の伝道師」ワイルドもアイルランド窮状へは他の誰にも負けない熱情を感じずにはいられなかった。ワイルドが「1848年のアイルランド詩人たち」について講演を行ったのはサンフランシスコ以外に数カ所であったと言われている。1882年のワイルドのアメリカ講演は元々はイギリスにおける唯美主義を一般アメリカ人に広めるためであったが、それがすべての講演ではなかった。ワイルドがアメリカにおいて祖国の自治回復のために聴衆を奮い立たせるような講演を行い、「美の伝道師」以外の政治的な顔を見せているのは極めて興味深いところがある。もしワイルドがその出演料をアイルランドへ寄付をしたということになれば、彼の名声は更に高まったであろう。しかし、ワイルドがそのような英雄的な行動を取ったという話は聞かない。ワイルドのアメリカ講演の題目はもっぱら「イギリスの文芸復興」「住宅装飾」「芸術と職人」であった。講演を通して聴衆がワイルドから得たものは講演の理解というよりは人間ワイルドへの興味・好奇心がはるかに強かった。そしてワイルドがアメリカ講演を通して得たものはアイルランド人としての再認識であった。Smith と Lewis は、ワイルドがイギリスへの帰途彼の洋服を船外に捨て、審美主義者ワイルドに別れを告げたと言っているが、

Smith と Lewis はアメリカ講演後にワイルドは政治的に大きな変化を見せたと考えているのであろうか。アメリカ講演後のワイルドに劇的な精神的変化が実際生じたか否かは断定できない。しかしアメリカ講演を通してワイルドの心の片隅には祖国アイルランドの独立闘争に対して何も出来ないことへの良心の呵責がくすぶり続けていたことは確かであろう。ワイルドも時代の子である。どんなに唯美主義を訴えても絶えず彼の心には祖国アイルランドが存在し続けていたのである。その意味でワイルドのアメリカ講演は単なる唯美主義宣伝のための講演旅行ではなく、祖国アイルランドを顧みる絶好の機会でもあったのである。

注

- (1) アメリカでの講演は Robert Ross ed.: *The First Collected Edition of the Works of Oscar Wilde 1908-1922* 15 volumes (London: Dawsons of Pallmall, 1969) の *Miscellanies* に集録されており、本論ではこれを使用した。なお、オスカー・ワイルド「著」:西村孝次訳「オスカー・ワイルド全集」(東京:青土社, 1988.9-1989.2) 中の5冊目に本論で扱う4題の講演の日本語訳があり、本論ではその訳を利用した。
- (2) ワイルドのアメリカ講演の詳細については Lloyd Lewis and Henry Justin Smith: *Oscar Wilde Discovers America [1882]* (New York: Benjamin Blom, 1936) を参照されたい。最初の講演の様子については pp. 57-59 で扱われている。
- (3) Ross, p. 244.
- (4) Ross, p. 245.
- (5) Ross, p. 248.
- (6) Ross, p. 251.
- (7) Ross, p. 251.
- (8) Ross, p. 258.
- (9) Ross, p. 263.
- (10) Ross, p. 265.
- (11) Ross, p. 267.

- (12) Ross, p. 268.
- (13) Ross, p. 269.
- (14) Ross, p. 276.
- (15) Lewis and Smith, pp. 60-61.
- (16) Ross, p. 282.
- (17) Ross, p. 282.
- (18) Ross, p. 285.
- (19) Ross, p. 286.
- (20) Ross, p. 288.
- (21) Ross, p. 290.
- (22) Ross, p. 293.
- (23) Ross, p. 294.
- (24) Ross, p. 295.
- (25) Ross, p. 297.
- (26) Ross, p. 298.
- (27) Ross, p. 299.
- (28) Ross, p. 299.
- (29) オスカー・ワイルド全集IV 西村孝次訳, p. 324.
- (30) Ross, p. 301.
- (31) Ross, p. 304.
- (32) Ross, pp. 306-307.
- (33) Ross, p. 308.
- (34) 平井正『オスカー・ワイルドの生涯』(東京:松柏社, 昭和35年), p. 51.
- (35) 詳細については Lewis and Smith, pp. 122-129 を参照。
- (36) Lewis and Smith, p. 442 and p. 443.
- (37) Lewis and Smith, pp. 442-443. アメリカ全講演の収益は21,946.56ドルで, ワイルドの収益は6,183.57ドルであったと Lewis と Smith は述べている。(p. 376参照。)
- (38) Lewis and Smith, p. 443.
- (39) Lewis and Smith, p. 444.
- (40) Lewis and Smith, p. 244.
- (41) Lewis and Smith, p. 366.
- (42) Lewis and Smith, pp. 366-7.

- (42) Lewis and Smith, p. 372.
- (43) Lewis and Smith, pp. 272-3.
- (44) Lewis and Smith, p. 41.
- (45) Lewis and Smith, p. 244.
- (46) R. A. Burchell: *The San Fransisco Irish 1848-1880* (Manchester: Manchester University Press, 1979), p. 4.
- (47) 西村, p. 171.
- (48) 西村, p. 171.
- (49) 西村, p. 172.
- (50) 西村, p. 174.
- (51) 西村, p. 179.
- (52) 西村, p. 180.
- (53) Una Ni Bhroimeil: *Building Irish Identity in America, 1870-1915* (Dublin: Four Courts Press LTD., 2003), p. 7.
- (54) Charles C. Tansill: *America and the Fight for Irish Freedom 1866-1922* (New York: The Devin-Adair Co., 1957), p. 61.
- (55) カービー・ミラー, ポール・ワグナー 茂木健訳『アイルランドからアメリカへ』(東京:東京創元社, 1998), p. 192.
- (56) Bhroimeil, p. 26.
- (57) Bhroimeil, p. 9.
- (58) Bhroimeil, p. 27.
- (59) Richard Ellmann: *Oscar Wilde* (New York: Vintage Books, 1988), p. 195.
- (60) Ellmann, p. 196.
- (61) Ellmann, p. 196.

参考文献

- W. F. Adams: *Ireland and Irish Emigration to the New World from 1815 to the Famine* (New York: Russell and Russell, 1967)
- Thomas N. Brown: *Irish-American Nationalism 1870-1890* (Philadelphia & New York: J. B. Lippincott Company, 1966)
- Donald H. Ericksen: *Oscar Wilde* (Boston: Twayne Publishers, 1977)
- Rupert Hart-Davis ed.: *The Letters of Oscar Wilde* (London: Rupert Hart-Davis Ltd., 1962)

Martin Fido: *Oscar Wilde* (London: Hamlyn, 1973)

J. Martin Evans: *America: The View From Europe* (San Francisco: San Francisco Book Company, Inc., 1976)

James C. Simmons: *Star-spangled Eden* (New York: Carroll & Graf Publishers, Inc., 2000)

Anne Varty: *A Preface to Oscar Wilde* (London and New York: Longman, 1998)

Carl Wittke: *The Irish in America A Students' Guide to Localized History* (New York: Teachers College Press, 1968)

P. ベアレソフォード・エリス 堀越智／岩見寿子訳『アイルランド史－民族と階級－「上・下」』(東京：論創社, 1991)

アメリカ古典文庫－21 岩永健吉郎他訳『ヨーロッパ人のアメリカ論』(東京：研究社, 1976)

坪井清彦・西前孝編『アメリカ作家とヨーロッパ』(東京：英宝社, 1996)

平井正『オスカー・ワイルド考』(東京：松柏社, 昭和55年)

山田勝『世紀末とダンディズム－オスカー・ワイルド研究－』(大阪：創元社, 1981)
カービー・ミラー, ポール・ワグナー 茂木健訳『アイルランドからアメリカへ』
(東京：東京創元社, 1998)